

【引用文献】

古川 郁夫・菅野 仁美,2004,古御堂笹尾山遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種.[一般国道 9号(名和淀江道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI第3分冊],鳥取県教育文化財団 調査報告書93,(財)鳥取県教育文化財団,181-186.

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴 リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

第9節 赤坂頭無し遺跡の総括

1 赤坂頭無し遺跡における縄文時代の落とし穴について(第81図、表29)

赤坂頭無し遺跡では、丘陵東側斜面において8基の落とし穴を検出した。

これらの落とし穴の検出面における平面形は、円形 (SK 9・12・14・15)・楕円形 (SK13)・方形 (SK11)・長方形 (SK10・16) の大きく4種類に分けられる。そのうち、SK10とSK14において底面に浅い小穴を検出したが、ほとんどの落とし穴では底面ピットは確認できなかった。

規模については、長軸の長さが0.7～1.0 m程度で、深さが1.2～1.5 m程度のものが多いが、SK10は長軸が1.5 m、短軸が1.3 m、深さが1.1 mであり、他と比べて表面積が大きい一方で浅い形状である。また、SK14は深さが1.87mとかなり深い。

遺物がほとんど出土しない落とし穴の年代を決定するのはむずかしいが、落とし穴の埋土中に含まれる炭化物の放射性炭素年代を測定する試みがなされてきた^(註1)。そして、こうした自然科学分析による測定結果と、落とし穴の形態的特徴との関係についての検討も試みられている。それによれば、底面ピットがない落とし穴は、縄文時代でも中期以前の古い段階にみられるとされる^(註2)。

たとえば、大山町小竹上鷹ノ尾遺跡では39基の落とし穴が検出されているが、早期末～前期初頭には平面円形で底面ピットのないものから、中期後葉になると平面方形または長方形で、底面ピットがあるものとないものが共存し、後期中葉には平面円形で底面ピットのあるものへと変化することが指摘されている^(註3)。同様に、大山町下市築地ノ峯東通第3遺跡の調査では、円形または楕円形で底面ピットのない落とし穴が、隅丸長方形および方形で底面ピットがある落とし穴に、中期を境として先行することが指摘されている^(註4)。

SK11～13・15は、放射性炭素年代測定の結果、縄文時代早期前半の値を得たことは、近年の調査成果にもとづく指摘を追認するものであろう。SK11は平面形が方形に近いが、円形の範疇に含めてもいいかもしれない。しかし、SK 9は平面円形で底面ピットのない、古い時期の形態的特徴をもつにもかかわらず、放射性炭素年代測定の結果は縄文時代後期前葉であった。この点は、分析した土

表29 赤坂頭無し遺跡の縄文時代落とし穴一覧

遺構名	規模 (長軸×短軸-深さ)cm	底面規模 (長軸×短軸)cm	平面形態	¹⁴ C年代	備考
SK9	106×92-145	61×52	円形	3670±30yrBP (縄文後期前葉)	
SK10	151×125-112	123×97	隅丸長方形		底面ピットあり
SK11	85×79-128	70×56	隅丸方形	8870±30yrBP (縄文早期前半)	
SK12	90以上×92-143	76以上×70	円形か	8870±30yrBP (縄文早期前半)	
SK13	82×57-125	68×65	楕円形	8880±40yrBP (縄文早期前半)	
SK14	104×90-187	78×76	円形		底面ピットあり?
SK15	77×70-134	69×63	円形	8870±40yrBP (縄文早期前半)	
SK16	100×75-118	62×50	長方形		

壤に混入があった可能性を考慮する必要がある。

また、年代測定を行っていないSK10・14・16であるが、SK10・16は、前者の平面形が隅丸長方形で底面ピットをもち、後者が平面長方形であるなど、形態的特徴からみて中期後葉以降に位置づけたいが、時期を決定する根拠に乏しい。SK14のピットは「底面ピット」ではない可能性が高く、そうすると、他の形態的特徴からみて、SK14は中期より前に位置づけられる。

次に、落とし穴の分布は、標高67.5～71.5mの丘陵斜面を範囲とするが、単独で存在するSK14を除けば、SK11～13・15は標高67.5～69.5mの範囲の調査区北壁付近に集中するか、または等高線に直交するように分布するのに対して、SK9・10・16はほぼ標高70.0mの等高線に沿って分布するように見える。

縄文時代晩期頃の落とし穴については、丘陵平坦面から斜面にかけての傾斜変換点付近に2基一對の落とし穴が列状に配列され、計画的で大規模な狩猟がおこなわれたことが指摘されている^(註5)。本遺跡のSK9・10・16の場合、SK9の年代に疑問が残るものの、SK10・16が中期後葉以降であるとなれば、同時期に「けもの道」に沿うかたちで一列に配置された可能性がある。一方で、SK11～13・15は、等高線に直交するように分布しており、「けもの道」を意識した計画的な配置とは考えにくい。北側の調査区外の状況が不明なので推測にすぎないが、非計画的かつ集中的に落とし穴を築いた可能性がある。

いずれにせよ、赤坂頭無し遺跡の位置する丘陵は、縄文時代早期前半および後期前葉を中心とする時期に、落とし穴を利用した狩猟をおこなうのに良好な立地であったといえよう。

【註】

- (1) 竹中孝浩1991「Ⅲ 2 (2) 縄文時代の調査 落とし穴」『V まとめ 縄文時代落とし穴の分布と時期』『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第69集
竹中孝浩1992「Ⅲ 2 (3) まとめ 落とし穴」『長谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第76集
- (2) 鬼頭紀子1996「まとめ」『小町第1遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書41
- (3) 鳥取県埋蔵文化財センター 2011『小竹上鷹ノ尾遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書42
- (4) 鳥取県埋蔵文化財センター 2012『下市築地ノ峯東通第3遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書43
- (5) 小谷郁夫2005「化粧川遺跡の落とし穴配列について」『化粧川遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書98
牧本哲雄2012「殿河内定屋ノ前遺跡の落とし穴について」『殿河内定屋ノ前遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書45

2 赤坂頭無し遺跡における竪穴住居跡の検討(第150・151図、表30・31)

赤坂頭無し遺跡では、弥生時代後期および古墳時代後期前葉に位置づけられる竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡5棟を検出した。竪穴住居跡では、壁際中央に位置するいわゆる特殊ピットや、間仕切り機能をもつものと考えられる柱壁間溝のほか、住居内を四周する壁溝に柱穴をもつものを検出した。県内では当該期の集落遺跡の調査例が少なく、集落形態や動向について未解明な部分が少なくない。ここでは、赤坂頭無し遺跡で検出した竪穴住居跡を中心に平面形・柱穴・特殊ピットといった特徴を整理したい。また、SI1の構造についても若干の考察を試みる。

(1)特徴の整理

平面形

本遺跡では円形と方形の住居跡を確認している。円形住居は1棟のみ確認しており、弥生時代後期のものである。そのほかの6棟はすべて方形住居であり(SI4は建て替えの前後でSI4-a、SI4-bとする)、いずれも古墳時代後期前葉のものである。方形住居のうち、SI3・SI4-a・SI4-b・SI6は正方形に近い。規模からみると、床面積がおよそ10㎡前後を示すSI3・SI4-a、20㎡前後を示すSI4-b・SI6の2つに分けられる。SI1は長方形を呈し、40㎡以上の数値を示す。

柱穴

主柱穴については、SI3が主柱穴0本、SI4-aが2本、SI1・SI4-b・SI6が4本である。補助柱穴はSI4-aとSI1にみられる。特にSI1は、補助柱穴の数が多く、床面だけでなく周壁溝の内外にもみられ、住居の構造が複雑である。

特殊ピット

特殊ピットについては、炉跡や祭祀関係、貯蔵穴、作業に伴うものなどとして県内外で報告されているが、いずれも具体的な性格や機能は明確ではない。主に古墳時代中期にみられるとされる^(註1)。本遺跡で確認した特殊ピットの中にも火や祭祀に関わると考えられるものがある。

特殊ピットをもつ住居はSI2・SI3・SI4-b・SI6である。いずれも南壁面の中央に位置し、平面は不整楕円形もしくは円形状で周壁溝を避けて作られている。掘り方をみると、穴を掘り窪めただけの簡素なものや、内部に手を加えて複雑な構造をもつものがある。SI2の特殊ピットは、平面形が

表30 赤坂頭無し遺跡の竪穴住居跡計測表

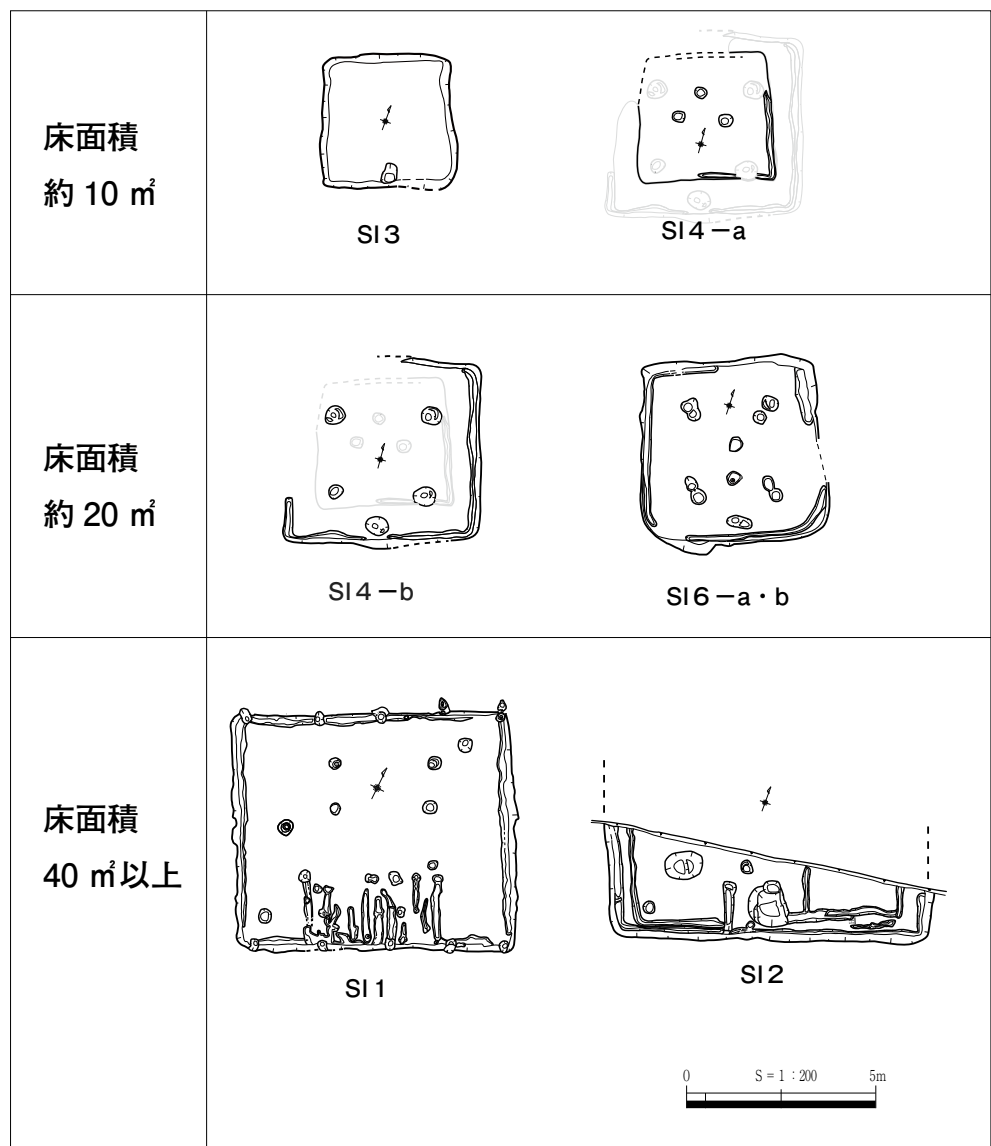
番号	遺構名	時期	標高(m)	平面形	規模		焼土面	硬化面	貼床	主柱穴	特殊ピット	柱壁間溝	周壁溝
					長軸×短軸(m)	床面積(㎡)							
1	SI1	天神川区期	73.8～74.2	長方形	7.4×6.2	40.0	有り	有り	有り	2or4	無し	5条～	有り
2	SI2	天神川区期	72.3～72.4	方形	8.6以上×2.9以上	23.0以上	不明	不明	有り	不明	有り	2条～	有り
3	SI3	天神川区期	73.3～73.6	正方形	3.5×3.4	9.5	無し	無し	無し	無し	有り	無し	無し
4	SI4-a	天神川区期以前	72.5～72.7	正方形	3.5×3.4	11.6	無し	無し	有り	2	無し	無し	有り
5	SI4-b	天神川区期	72.5～72.7	正方形	5.2×5.0	23.0	無し	無し	有り	4	有り	無し	有り
6	SI6-a	天神川区期以前	71.3～71.4	方形	不明	不明	無し	無し	不明	4	無し	無し	無し
7	SI6-b	天神川区期	71.3～71.4	正方形	4.9×4.7	22.1	無し	無し	有り	4	有り	無し	有り
8	SI7	天神川区期	71.2～71.6	方形	3.2以上×1.2以上	2.0以上	不明	不明	無し	不明	不明	不明	不明

不整楕円形をした長径1 m前後、最大深部は22cmを測る土坑状の遺構である。内部は一部に地山であるローム由来土を土手状に盛った部分や、礫を詰めた状況を確認しており柱穴とは明らかに異なる。SI3のP1は、平面形が不整楕円形で、SI2と同様に内部にはローム由来土を土手状に盛る。SI4-bのP5は、平面形が円形をした柱穴状の遺構である。同住居跡にて検出した支柱穴と同規模で、埋土中には微量ではあるが炭や焼土塊を含む。特殊ピットの近辺には被熱痕は確認できないが、住居の中央には焼土面を確認している。SI6のP11は、平面形が楕円形の遺構である。浅く掘り窪めたもので、内部中央からはほぼ完形の須恵器甕が円形孔を下にして横倒しの状態で出土した。他の遺跡においても、特殊ピットより滑石製勾玉や手捏ね土器などの遺物が出土している例があり、祭祀的なものと考えられている。SI6についても同様の性格をもったものと考えられる。

本遺跡で確認した特殊ピットには構造が複雑なものがあるほか、火に関連するものや祭祀的な性格をもつものがあり、同じ集落内でも各住居によって特殊ピットの形態や規模、性格や機能が異なるように、同時期にいくつかのパターンが並行していることがわかる。

壁溝

SI3、SI7以外で周壁溝を確認している。基本的には住居の壁際に沿って巡るが、部分的に溝が切れるものがある。また、壁際に沿う壁溝とは別に、住居内を区画する柱壁間溝がみられる。SI1では、南壁面より数条の溝が北に向けて伸びる。このうち両端の2本は柱穴に連結する。SI2では2本の溝が南壁面から、特殊ピットを挟んで北に伸びており、特殊ピットに伴う施設の可能性がある。



第150図 赤坂頭無し遺跡の竪穴住居跡

表31 県内における壁溝内に柱穴をもつ住居一覧

番号	遺跡名	所在地	時期	主軸	標高 (m)	平面形	規模		焼土面	硬化面	貼床	主柱穴	壁溝内 柱穴	特殊 ピット	柱壁 間溝	周壁溝
							長軸×短軸(m)	床面積(m ²)								
1	夏谷遺跡 5号住居	倉吉市	後期前葉 (5世紀後半)	N-55°-W	95.6 ~96.5	正方形	3.8×3.8	11.9	無し	不明	有り	無し	4	有り	無し	有り
2	梅田萱峯 遺跡SI50	琴浦町・ 大山町	後期(TK10~ MT15併行)	N-28°-W	63.6 ~64.2	長方形	8.3×6.6	41.3	有り	不明	有り	6	12	無し	無し	有り
3	青木遺跡 B区SI03	米子市	前期(青木V・ VI期)	N-49°-W	-	長方形	5.0×3.7	16.0	無し	不明	不明	無し	6	有り	無し	有り
4	青木遺跡 H区SI37	米子市	前期以降(青木 V・VI期以降)	N-4°-W	37.2 ~37.8	正方形	3.0×3.0	6.8	無し	不明	不明	無し	5	有り	無し	有り
5	赤坂頭無し 遺跡SI1	大山町	後期前葉(天神 川区併行)	N-26°-W	73.8 ~74.2	長方形	7.4×6.1	40.0	有り	有り	有り	2or4	12	無し	5条	有り

(2) 赤坂頭無し遺跡にみる竪穴住居の種類

以上より、赤坂頭無し遺跡の竪穴住居の特徴を整理すると、平面形と床面積の項目から、平面正方形で床面積10㎡前後(SI3・SI4-a)、平面正方形で床面積20㎡前後(SI4-b・SI6-a・b)、平面長方形で床面積40㎡以上(SI1)の3つに分けられる。以下、10㎡前後のものを小型住居、20㎡前後のものを中型住居、40㎡以上のものを大型住居とする。その中で、小型住居は主柱穴があるものと無いものがあるほか、特殊ピットの有無もみられる。中型住居はいずれも主柱穴4本で、特殊ピットが存在する。大型住居はSI1のみであるが、一部分の検出であるSI2も一辺が8.6mあることから、SI1と同規模以上の可能性がある。特殊ピットの有無の差はあるが、いずれも柱壁間溝をもつ。

検出した住居跡は南北に伸びる細い丘陵の地形にあわせて建てられている。このうち、小型・中型住居は尾根から斜面への境界付近に当たる周辺部に築かれているが、大型住居は丘陵の頂部平坦面に立地する。同時期と考える大型の掘立柱建物跡群SB1~3も頂部平坦面に築かれており、大型住居とあわせて集落の中でも中心的な役割をもつ構造物であったと考える。規模や立地の面から大型住居と小型・中型住居の差が明確である。また、一部のみの検出であるSI7については、周壁溝をもたない住居であると確認している。規模は不明であるが、丘陵の平坦面から離れた傾斜面に立地し、周壁溝をもたない住居構造をとる小・中型住居と推測する。

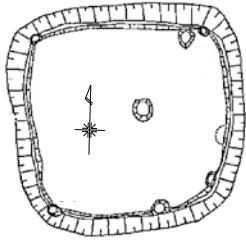
(3) 大型住居SI1について

赤坂頭無し遺跡では壁溝内に柱穴をもつSI1を検出した。同遺跡にて検出した他の住居と比べて、規模や構造、立地の点からみて、性格が異なるものと考えられる。県内では、SI1と同様、古墳時代の中で壁溝内に柱穴をもつ住居が、倉吉市、大山町、米子市に数例存在する。このSI1の構造と性格を捉えるために例を挙げてみていく。以下、各住居の内容を概観する。

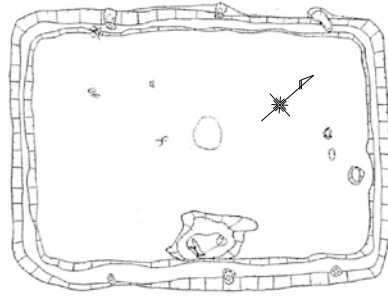
まずはSI1の内容を整理すると、調査範囲の中では最も標高の高い丘陵の平坦面に位置する。確認した規模は長軸7.4m、短軸6.1m、床面積40.0㎡を測り、本遺跡内では群を抜いて大きい。構造も複雑で、床面には複数の柱穴と被熱面のほか、南北に数条並行して伸びる柱壁間溝を検出した。

米子市青木遺跡H区SI37号住居^(註2)は平面形が正方形で床面積6.8㎡である。前期以降と考えられる住居で、SI1に比べると時期は古く規模は小さい。周壁溝内に確認できる柱穴は5本あり、4隅に各

古墳時代前期以降

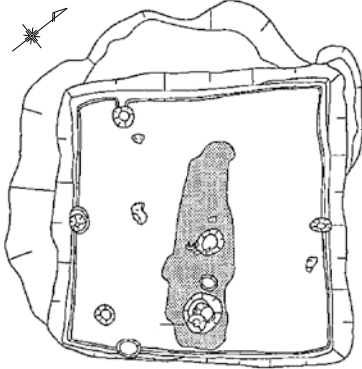


4 米子市 青木遺跡 H区 SI37

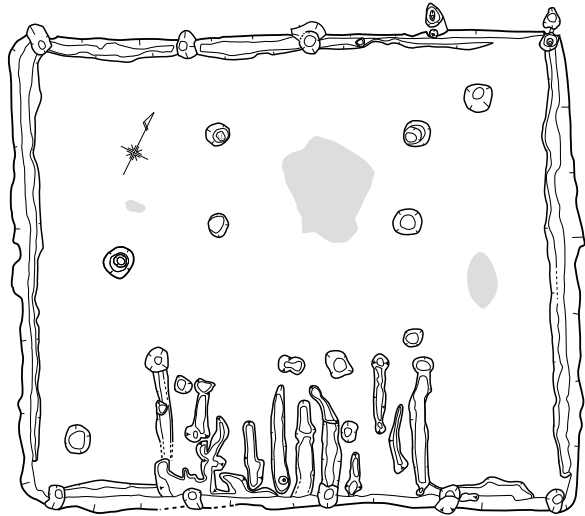


3 米子市 青木遺跡 B区 SI03

古墳時代後期前葉

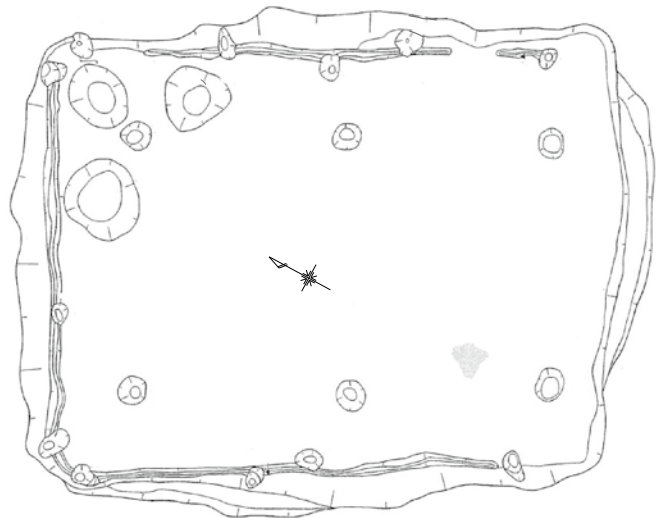


1 倉吉市 夏谷遺跡 5号住居



5 大山町 赤坂頭無し遺跡 SI1

古墳時代後期中葉



2 大山町 梅田萱峯遺跡 SI50

0 S = 1 : 100 2m

第151図 県内における古墳時代の主要な竪穴住居跡の例

1本、南壁面中央からやや東寄りに1本みられる。各柱穴の規模は径約15～20cm、深さ10cm前後と規模の小さいものである。そのほか、床面中央には平面円形の特殊ピットがみられる。

同遺跡B区SI03号住居^(註3)は平面形が長方形で床面積は16.0㎡を測る。壁溝内の柱穴は6本あり、住居の長軸辺にあたる深さ5cmの壁溝に各3本ずつ小さな柱穴が等間隔にみられる。柱穴は間隔が約1.4mあり、対峙する壁面と対応する位置にある。各柱穴の規模については深さが不明であるが、径約10～20cmと径の小さなものである。そのほか、柱穴以外では南東壁面に平面楕円形の特殊ピットが配されている。住居は前期のもので、SI1に比べ時期が古く規模も小さいが、平面形や、柱穴の配列に似ているものがある。

倉吉市夏谷遺跡5号住居^(註4)は平面形が正方形で床面積11.9㎡を測る。壁溝内の柱穴は大小4本あり、北東壁面と南西壁面の中央に各1本。北西壁面と南東壁面の柱穴については南西壁面寄りに各1本配される。各柱穴の規模は径30cm前後、深さ20～60cmあり、十分な規模である。そのほか、床面には住居中央に平面形が円形の中央ピット、南東壁面際中央に平面形が円形の特殊ピットをもつ。時期は、赤坂頭無し遺跡と同じ後期前葉のもので、SI1に比べ規模の小さい住居である。

大山町梅田萱峯遺跡SI50号住居^(註5)は平面形が長方形で床面積41.3㎡を測る大型住居である。主柱穴6本のほか壁溝内には12本の柱穴があり、長側辺の北東壁面に6本、対峙する南西壁面に5本、短側辺の北西壁面に1本みられる。各辺によって柱穴の数が異なり、柱穴間隔にも違いがあるが、基本的には向かい合う壁面の柱穴は対応する位置にある。柱穴の規模は様々で、径20cm前後を示すものから長径50cm、短径25cmを測るものもある。深さは浅いものもあるが、50cm前後のものが多く、柱穴によっては主柱穴の規模と変わらないものがいくつかある。時期は後期中葉のもので、SI1と比べるとやや新しい。

以上、各住居を概観した。壁溝内に柱穴をもつ住居については、上述したもの以外にもいくつかあるが、その多くは柱穴が小さく、堰板を留める杭痕と考えられている。米子市青木遺跡SI37・SI03の例をみると時期は古く、壁溝内の柱穴は小規模で、主柱穴というよりは補助的な役割をもつもの、もしくは堰板の杭痕の可能性が高い。倉吉市夏谷遺跡5号住居はSI1と同時期のものである。主柱穴をもたない規模の小さな住居であるが、壁溝に配された柱穴には深さがあることを考慮すると、十分に主柱穴の役割を担っていたと考えられる。大山町梅田萱峯遺跡SI50は住居の平面形や規模、壁溝内の柱穴の配置が赤坂頭無し遺跡のSI1に近い。床面積の広さに伴い、上屋構造を支えるために主柱穴が多い。壁溝に配された柱穴については、柱穴の規模を考えると堰板杭とは考えにくく、主柱穴と同様に屋根を支えた柱穴であると考えられる。

次に、SI1の構造について考えてみたい。SI1は梅田萱峯遺跡SI50と平面形や規模、周壁溝内の柱穴の配置が近似している。特に周壁溝内の柱穴は主柱穴と変わらない規模のものであることから、主柱穴と同様に上屋構造を支えた柱穴であったと考える。その構造は、主柱穴とする4本を主体に梁がわたり、屋根となる部材が梁に架けられ、梁に架けられた部材は地面に直接架けるのではなく、周壁溝内に立てた柱を結んだ梁に架けていたものと推定する。また、主柱穴以外にも床面には複数の柱穴があるが、周壁溝内の柱と梁で結ばれた補助的な柱穴であったと考える。このように、SI1は壁立式の住居であったと考える。同様に梅田萱峯遺跡SI50も壁立式の住居であった可能性がある。そのほか、内部には大小3箇所焼土面を検出している。このうち、長幅1.4m、短幅1.2mの不整楕円形状の焼土面1が主柱穴に囲まれるように位置している。かなり広範囲にみられるほか、床面には深く被熱痕

が観察でき、長期的に繰り返し火を扱っていたことが確認できる。

以上、赤坂頭無し遺跡のSI1と同じく、壁溝内に柱穴をもつ住居を確認できたが、その多くは堰板杭や補助的な役割をもつものであった。前期以降に位置づけられる青木遺跡の住居2例については堰板杭と考えられ、柱穴としての役割をもつ住居は、夏谷遺跡や赤坂頭無し遺跡の住居のように、後期に入ってから出現することを確認できた。そして、後者のような住居の上屋構造を復元すると、壁立式の住居の可能性が高いと考えられた。住居の性格としては、SI1の周辺には大型の掘立柱建物であるSB1・2が並存していたと考えられ、集落の重要な施設であったと推測する。

【註】

- (1) 岩崎康子1998「古墳時代集落の様相」『石脇第3遺跡－森末地区・繰り地区－、石脇第8・9号墳、寺戸第1遺跡、寺戸第2遺跡、石脇第1遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書54
- (2) 鳥取県教育委員会1978『青木遺跡Ⅲ』
- (3) 前掲(註2)文献
- (4) 倉吉市教育委員会1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第84集
- (5) 鳥取県埋蔵文化財センター 2009『梅田萱峯遺跡Ⅴ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書28

【挿図出典】

(第151図)

1：前掲(註4)文献、2：前掲(註5)文献、3・4：前掲(註2)文献、以上から引用・改変して、作成した。

3 赤坂頭無し遺跡の掘立柱建物跡について(第152・153図、表32)

赤坂頭無し遺跡では、5棟の掘立柱建物跡を検出した。そのうち、SB1とSB2が平面方形プランで「屋内棟持柱」^(註1)をもち、SB3は二面庇付きであるなど、特殊な構造の掘立柱建物跡であった。ここでは、これら3棟の掘立柱建物跡について、取り上げることとする。

(1) 屋内棟持柱付建物

まず、SB1とSB2は、いずれも平面形は梁行が4間、桁行が4間の方形プランの掘立柱建物跡であった。規模は、SB1が7.5×8.0mで、面積が60.0㎡であり、SB2が6.4×7.0mで、面積が44.8㎡であった。主柱穴の規模は、SB1は径が平均48cm、深さが平均43cmで、SB2は径が平均45cm、深さが平均47cmであり、柱間距離はSB1が平均1.8mで、SB2が平均1.7mであった。

両建物跡は、いずれも南北筋の柱穴列(建物跡の東西両側の柱穴列)の中央、すなわち棟通りに当たる柱穴の内側にも柱穴を有しており(SB1のP17・18、SB2のP17・18)、「屋内棟持柱」付建物であったと考える。宮本長二郎氏によれば、この構造の建物にはA～C型の3類型があるとされ^(註2)、SB1とSB2は、いずれも屋内棟通りの両妻側寄りの2ヵ所に棟持柱があることからB型に分類できる。この類型をとる建物の屋根形式は入母屋造または寄棟造であり、梁行が3～5間で、その長さが5～8mを測る大型の平地式建物に復元できる^(註3)。

類例としては、鳥取県内では倉吉市大山池遺跡8号建物(弥生中期末)^(註4)や同横峯遺跡A地区2号建物(古墳後期)^(註5)があるが、前者がC型で後者がA型であるから、いずれも本遺跡の構造とは異なる。B型の例として、西伯郡大山町茶畑山道遺跡SB23(弥生中期中葉)^(註6)のほか、米子市百塚第7遺跡SB03(古墳後期前葉)^(註7)、東伯郡琴浦町八橋第8・9遺跡SB4(古墳後期後葉)^(註8)が挙げられる。県外の例としては、福岡県江辻遺跡(縄文晩期末)、滋賀県野尻遺跡SB3(弥生後期後半)、静岡県古新田遺跡3-1号建物他8棟(古墳後期前葉)、奈良県阿部丘陵中山地区SB01(後期末)などが挙げられるほか^(註9)、兵庫県柿坪遺跡SB-II-08・12・22(古墳中期～後期)でも確認されている^(註10)。時期は、福岡県江辻遺跡を例外として、弥生時代中期～後期と古墳時代後期～終末期を中心にみられる。なかでも、兵庫県柿坪遺跡や静岡県古新田遺跡の例は、SB1・2ともよく類似する平面プランであり、ほぼ同時期に位置づけられる。

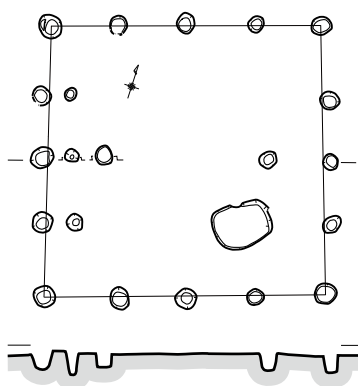
大型の掘立柱建物の場合、その性格を倉庫以外に、豪族居館や祭祀的な施設などと解釈される場合が多い。SB1とSB2は、ほぼ同様な平面プランを呈すること、尾根の最も良好な位置を占有することからみて、集落内で中心的な役割を果たした建物であったらう。一方で、SI1やSI2などの大型の竪穴住居跡にそれぞれ近接するから、単なる居住施設ではなく、なおかつ平地式建物であることから、一般的な倉庫とも異なると考える。

また、SB1内の東南隅とSB2内の北西隅で、それぞれ土坑SK4とSK5を検出しており、これらの土坑からは、須恵器や土師器が出土している。両建物はその内部に広い空間をもつことからみて、集落の構成員が土器を用いた祭祀を含む目的で集まる場として機能した可能性もあろう。

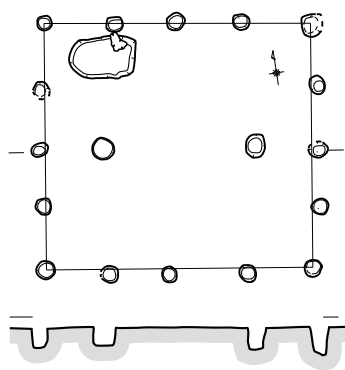
(2) 二面庇付き建物

次に、SB3は身屋(主屋)の柱間が梁行2間×桁行4間、規模が5.0×8.3m、面積が41.5㎡であり、妻側の中央柱穴が柱筋より1本分程度外側にずれる「近接棟持柱」の建物であった。身屋の東西の平側

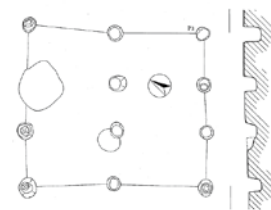
〔屋内棟持柱付き建物の例〕



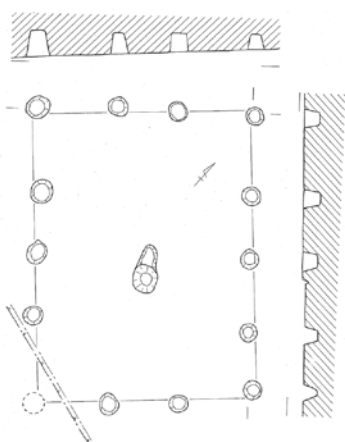
1. 赤坂頭無し遺跡 SB1



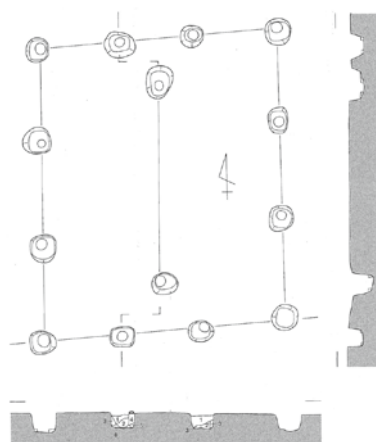
2. 赤坂頭無し遺跡 SB2



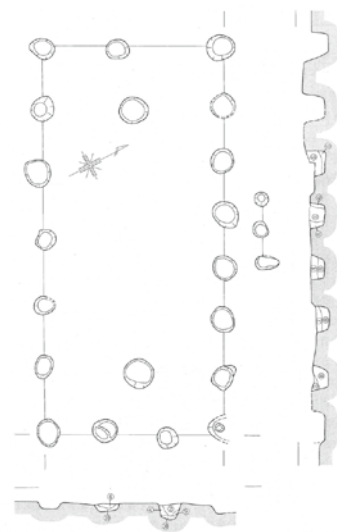
4. 米子市百塚第7遺跡 SB03 (後期前葉)



3. 倉吉市 (旧関金町) 横峯遺跡
A地区2号建物 (後期)

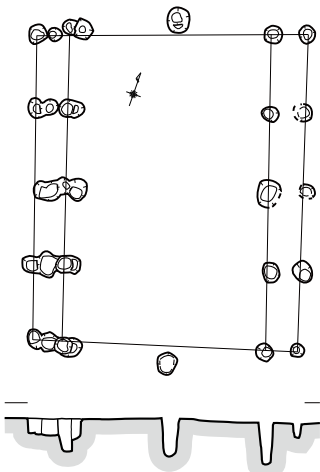


6. 兵庫県朝来市柿坪遺跡 SB-II-08 (中期後葉)

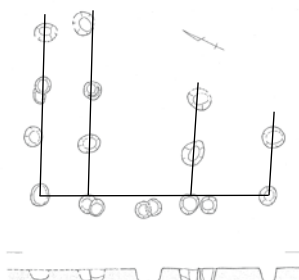


5. 琴浦町八橋第8・9遺跡 SB4 (後期後葉)

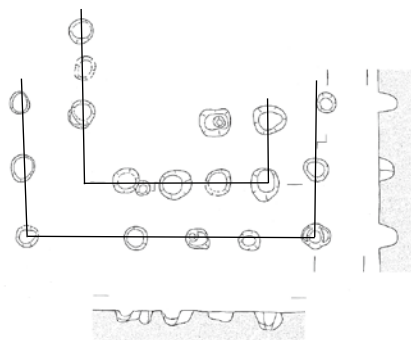
〔庇付き建物の例〕



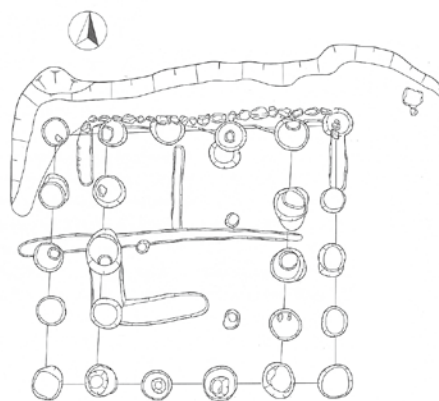
7. 赤坂頭無し遺跡 SB3



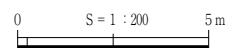
8. 名和飛田遺跡 SB3 (後期末)



9. 名和飛田遺跡 SB4 (後期末)



10. 麦木晩田遺跡松尾頭地区 SB41
(弥生後期)



第152図 赤坂頭無し遺跡の掘立柱建物跡とその類例

には、各主柱穴に対応する形で小規模の柱穴列が並んでおり、身舎の主柱穴の規模は、径が平均47cm、深さが平均86cmであるのに対して、平側の柱穴列の規模は、径が平均42cm、深さが平均34cmであった。これらは「外周柱穴列」と呼ばれ、建物本体と一体型または非一体型の庇、裳階、仮設の土庇、床張りの縁、軒支柱、塀や柵などの役割をもった可能性がある^(註11)。SB3の外周柱穴列の場合、身舎の柱間隔とほぼ対応すること、柱穴の深さが身舎の半分以下であること、身舎平側の柱筋との間隔が1m弱であることから、庇の柱穴と捉え、二面庇付きの建物であったと考える。

古墳時代以前に遡る庇付建物の例は全国的に多くはないが、弥生時代中期頃には出現するようである。鳥取県内では、先述の倉吉市大山池遺跡8号建物や、中期末の米子市馬山馬籠遺跡8号建物^(註12)のような出現段階の庇付建物のほか、弥生時代後期の麦木晩田遺跡松尾頭地区SB41^(註13)などの例が確認されている。古墳時代の例としては、後期末の名和飛田遺跡の掘立柱建物跡(SB)3・4が挙げられる。掘立柱建物跡3は二面庇付建物であり、掘立柱建物4は四面庇付建物と推定される^(註14)。

SB3の上屋構造としては、規模も大きく、身舎の主柱穴が深いことから、庇付大型の高床建築であったと考える。ただし、SB3はSB1の後に築かれ、周辺のSB2やSI1、SI2などの建物群と同時併存していたかどうかは不明であるので、周辺建物群との関係からその性格を理解するのはむずかしい。現状では、その性格として、大型の高床倉庫のほかに、祭殿などの可能性を示唆しておきたい。

(3) 県内中西部地域における古墳時代の掘立柱建物跡との比較

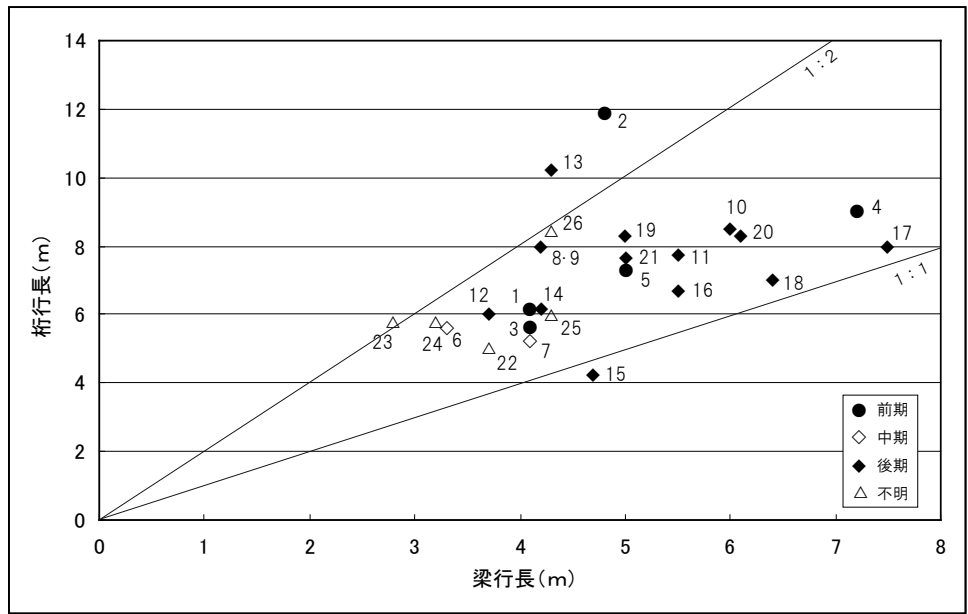
ここでは、県内における古墳時代の主要な掘立柱建物跡との比較を行うが、当該期の資料の多い中西部地域を対象とし、規模が平面積15㎡以上の中大型の掘立柱建物跡を取り上げる。表32に示すとおり、当該地域における中大型の掘立柱建物は古墳時代全般をとおしてみられ、時期比定が困難ではあるが、大まかにいって、中期にはその数が少なくなり、後期になると増加する傾向にある。

対象となる掘立柱建物跡について、桁行(長さ)と梁行(幅)の長幅比を検討した^(註15)(第153図)。その結果、赤坂頭無し遺跡のSB1とSB2は、対象地域における中大型建物の中でも、規模の大きな建物に含まれることがわかる。また、多くの建物の場合、長幅比が1:1と1:2の中央付近に集まるが^(註16)、SB1・2は長幅比が1:1に近い。同様の建物として、百塚第7遺跡SB03が挙げられるが、この建物は、SB1・2と同様、屋内棟持柱B型の構造をとる。

一方、SB3の身舎の規模は、中大型建物の中では平均的な規模であり、長幅比も平均的であることがわかる。すなわち、二面庇付きである点を除けば、一般的な構造の建物であったといえよう。

そのほか、特徴的な構造をもつ建物の規模と長幅比をみると、大山町茶畑第1遺跡の掘立柱建物12は独立棟持柱をもつが、長幅比が1:2を超えるものであった。同様に、長幅比が1:2を超える琴浦町八橋第8・9遺跡SB4は、屋内棟持柱B型の構造をもつ建物である。また、長瀬高浜遺跡SB30bは、屋内棟持柱をもつ可能性があり、独特の構造をもつが、平面積64.8㎡と規模が大きい。このように、棟持柱などの独特な構造をもつ掘立柱建物は、長幅比や規模において、一般的な建物から外れる傾向があるといえよう。

以上のことから、本遺跡における掘立柱建物跡の構造は、SB1とSB2が屋内棟持柱付きの大型平屋建物であり、SB3が二面庇付きの高床建物であると推定できた。そして、SB1・2は同時期の県内における一般的な中大型建物と比較して規模が大きいばかりか、独特の構造をとること、SB3の身舎は一般的な構造であるにもかかわらず、庇という独特な付属施設をとることも確認できた。



※番号は表32のNo.と対応する。

第153図 県内中西部地域における主要掘立柱建物の規模の比較

【註】

- (1) 宮本長二郎1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- (2) 前掲(註1)文献。屋内棟持柱構造をとる建物のうち、屋内棟通り中央に1カ所の棟持柱をもつものをA型、棟通りの両妻側寄りの2カ所に棟持柱を立てるものをB型、屋外の近接棟持柱と屋内棟持柱が一体となって棟木を支持するものをC型に分けた。
- (3) 前掲(註1)文献
- (4) 関金町教育委員会1985『大山池遺跡(上野辺地区)・大坪古墳群発掘調査報告書』
- (5) 関金町教育委員会1986『横峯遺跡発掘調査報告書』関金町文化財報告書第8集
- (6) 名和町教育委員会1999『茶畑山道遺跡』
- (7) 財団法人鳥取県教育文化財団1995『百塚第7遺跡(8区)』鳥取県教育文化財団調査報告書38
- (8) 財団法人鳥取県教育文化財団2004『八橋第8・9遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書87
- (9) 前掲(註1)文献
- (10) 兵庫県教育委員会2008『柿坪遺跡：朝来市山東町所在』兵庫県文化財調査報告第336冊
- (11) 奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』
- (12) 溝口町教育委員会1989『長山馬籠遺跡』
- (13) 大山町教育委員会他2000『麦木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集
- (14) 日置 智2005「大型建物をもつ古墳時代後期の名和飛田集落について」『名和飛田遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書104
- (15) 鳥取県中西部地域を中心とする弥生～古墳時代の掘立柱建物に関する長幅比の検討は、高田健一氏が行っており、本報告でも同様な方法を試みる。
高田健一2010「古墳時代集落と掘立柱建物」『出雲大社の建築考古学』同成社
- (16) 前掲(註15)文献。高田健一氏によれば、長幅比1：2以下で、桁行が梁行の1.2倍程度となる、長方形で30㎡を超える建物(Ⅱ類建物)は、弥生時代後期に登場し、古墳時代をとおして踏襲され、平地式建物が多い。

【挿図出典】

(第152図)
 3：前掲(註5)文献、4：前掲(註7)文献、5：前掲(註8)文献、6：前掲(註10)文献、10：前掲(註13)文献
 8・9：財団法人鳥取県教育文化財団2005『名和飛田遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書104
 以上から引用・改変し、作成した。

表32 県内中西部地域における中大型掘立柱建物跡

No.	遺跡名	遺構名	所在地	梁×桁(間)	梁行×桁行(m)	平面積(m ²)	時期	備考
1	青木遺跡	F地区SB24	米子市	1×3	4.1×6.1	25	前期初頭	
2	茶畑第1遺跡	掘立柱建物12	西伯郡大山町	2×7	4.8×11.9	57.6	前期	独立棟持柱
3	笠見第3遺跡	SB15	東伯郡琴浦町	2×3	4.1×5.6	23	前期	
4	長瀬高浜遺跡	SB30b	東伯郡湯梨浜町	2×2	7.2×9.0	64.8	前期	屋内棟持柱?
5		SB36	東伯郡湯梨浜町	1×3	5.0×7.3	36.5	前期～中期	屋外に柱穴が付属する
6	上伊勢第1遺跡	掘立柱建物2	東伯郡琴浦町	2×3	3.3×5.6	18.5	中期以降	
7		掘立柱建物3		2×2	4.1×5.2	21.4	中期以降	
8	青木遺跡	H地区SB01	米子市	2×4	4.2×8.0	33.6	後期	
9		H地区SB02		2×4	4.2×8.0	33.6	後期	
10	横峯遺跡	A地区SB-01	倉吉市	4×5	6.0×8.5	51	後期	
11		A地区SB-02		3×4	5.5×7.7	42.4	後期	屋内棟持柱A型
12		B地区SB-04		2×3	3.7×6.0	22.2	後期	近接棟持柱
13	八橋第8・9遺跡	SB4	東伯郡琴浦町	3×7?	4.3×10.2	43.9	後期以降	屋内棟持柱B型
14	百塚第7遺跡	SB01	米子市	2×3	4.2×6.2	26	後期前葉	
15		SB03		2×3	4.7×4.2	19.7	後期前葉	屋内棟持柱B型?
16	大下畑遺跡	SB02	米子市	3×4	5.5×6.7	36.9	後期前葉	
17	赤坂頭無し遺跡	SB1	西伯郡大山町	4×4	7.5×8.0	60	後期前葉	屋内棟持柱。SK4を伴う
18		SB2		4×4	6.4×7.0	44.8	後期前葉	屋内棟持柱。SK5を伴う
19		SB3		2×4	5.0×8.3	41.5	後期前葉	両面庇付
20	名和飛田遺跡	掘立柱建物1	西伯郡大山町	4×5	6.1×8.3	50.7	後期末	
21	横谷遺跡	掘立柱建物	倉吉市	3×4	5.0×7.6	37.7	後期末	
22	上種第5遺跡	掘立柱建物5	東伯郡北栄町	2×3	3.7×5.0	18.5	不明	総柱
23		掘立柱建物6		2×3	2.8×5.7	16	不明	
24		掘立柱建物12		1×3	3.2×5.7	18.4	不明	
25	上種第6遺跡	掘立柱建物4	東伯郡北栄町	3×4	4.3×5.9	25.13	不明	柵列が付属
26	百塚第5遺跡	SB04	米子市	2×5	4.3×8.4	36.1	不明	

表出典

- 1：鳥取県教育委員会1976『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ F・J地区』
- 2：財団法人鳥取県教育文化財団2004『茶畑第1遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書93
- 3：財団法人鳥取県教育文化財団2004『笠見第3遺跡』鳥取県教育文化財団発掘調査報告書86
- 4・5：財団法人鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ』鳥取県教育文化財団調査報告書14
- 6・7：財団法人鳥取県教育文化財団2005『上伊勢第1遺跡 三保第1遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書96
- 8・9：鳥取県教育委員会1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ A・B・E・H地区』
- 10～12：関金町教育委員会1986『横峯遺跡発掘調査報告書』関金町文化財報告書第8集
- 13：財団法人鳥取県教育文化財団2004『八橋第8・9遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書87
- 14・15：財団法人鳥取県教育文化財団1995『百塚第7遺跡(8区)』鳥取県教育文化財団調査報告書38
- 16：財団法人鳥取県教育文化財団1994『大下畑遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書36
- 20：財団法人鳥取県教育文化財団2005『名和飛田遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書104
- 21：倉吉市教育委員会1995『横谷遺跡発掘調査報告書』
- 22～24：大栄町教育委員会1985『上種第5遺跡発掘調査報告』大栄町文化財調査報告書第14集
- 25：大栄町教育委員会1985『上種第6遺跡発掘調査報告』大栄町文化財調査報告書第15集
- 26：財団法人鳥取県教育文化財団1995『百塚第5遺跡 小波狭間谷遺跡 泉上経前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書37

4 赤坂頭無し遺跡出土の須恵器・土師器について(第154～156図、表33・34)

赤坂頭無し遺跡からは、竪穴住居跡内や土坑中から多くの須恵器・土師器が出土した。とりわけ、須恵器は、県内で出土する須恵器の中でも早い時期に含まれるものであり、出現期の様相を考える上で重要である。ここでは、本遺跡出土の須恵器・土師器について整理するとともに、県内出土の出現期の須恵器について検討することとする。

(1)赤坂頭無し遺跡出土の須恵器・土師器

本遺跡においては、須恵器では蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甗・壺・大甕等が、土師器では丸底椀・脚付椀・高坏・壺・甕等が出土した。ここでは、代表的な器種について分類をおこない、先学の編年と形態的特徴を比較しながら、本遺跡から出土した須恵器と土師器の年代的位置づけについて検討する。

①須恵器(第154図)

蓋坏：蓋・身ともに口径または受部径が13.0～14.0cm程度のもの(a型式)と、12.0～13.0cm程度のもの(b型式)がある。a型式の蓋は口縁端部が丸く、その内側が凹み、肩部の稜を鋭く突出させ(248)、身は底部がやや平たいほか、口縁端部が丸く、その内側に沈線が入り、蓋受けを細長く突出させる(252)。b型式は、蓋・身とも口縁端部を面取りするもので、蓋は天井部がやや丸みをもち、肩部の稜は体部側を強く押さえて作り出し(33・81・143)、身は底部が丸みをもち、立ち上がりが高くやや内傾する(112・113・293)。

有蓋高坏A類：坏部は丸底で、脚部は透かしを入れず、ハの字状に開き、脚端部を水平に面取りする(116)。

B類：坏部は丸底で、脚部は3方向に長方形一段透かしを入れ、脚端部はやや肥厚させてから接地面を細く丸くつくる(253)。

蓋は口径が11.0～12.0cm程度のもの(109・110)と、口径が13.0cm程度のもの(249)があり、いずれも肩部に稜が入る。前者は中央の凹むつまみが付く。有蓋高坏A・B類いずれともセットになる。

無蓋高坏A類：口縁部が開き、体部中位に波状文を施す(120)。

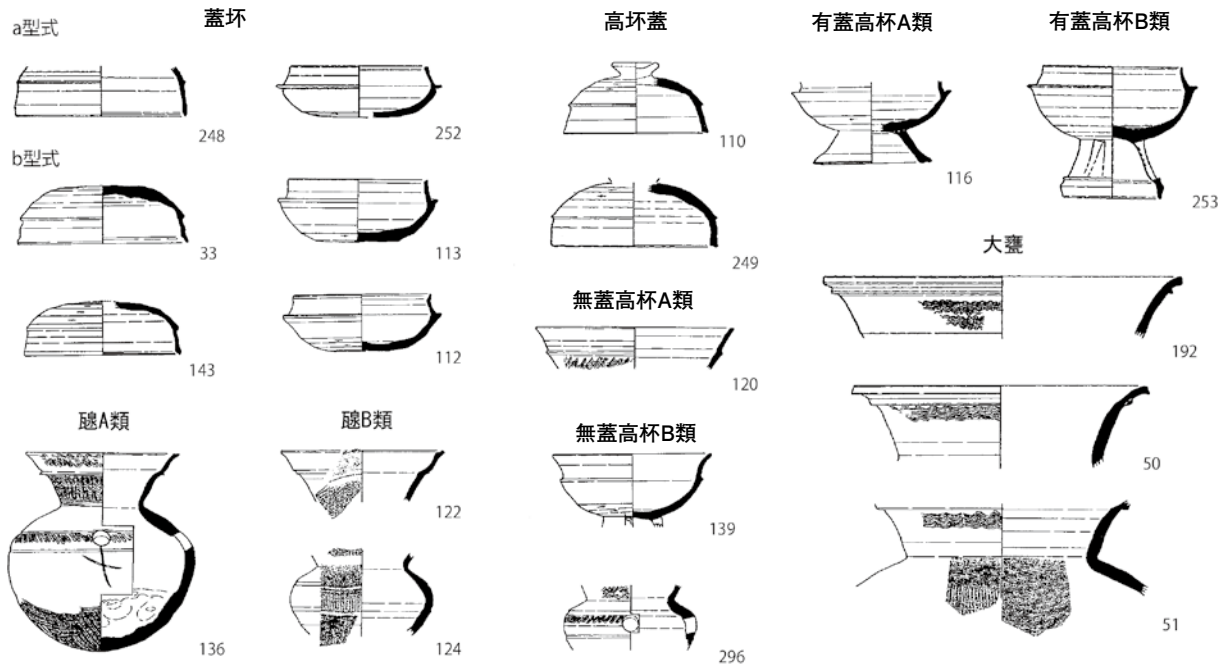
B類：A類よりも口径が小さく、口縁部が外反し、体部中位に波状文を施すもので、3方向に長方形一段透かしを入れると推定する(139)。

甗A類：大型のもので、口頸部が胴部より小さく、口縁～頸部に波状文、胴部中位に櫛歯刺突文を施し、底部にタキ痕を残す(136)。やや古式の特徴を残す。

B類：口縁部が開いて、口径が胴部最大径以上となり、胴部の肩がやや張るもので、口縁～頸部に波状文、胴部中位に櫛歯刺突文を施す(122・124・296)。

大甕：外面口縁部の直下に断面三角形の凸帯を貼り付ける古式の特徴をもつもので、頸部には波状文を施す(50・51・192)。

本遺跡出土須恵器の形態的・技術的特徴をもとに、陶邑編年^(註1)と比較すると、蓋坏a型式・甗A類・大甕がTK23型式期併行、蓋坏b型式・有蓋高坏B類がTK47型式期併行、無蓋高坏A・B類・甗B類がTK23～TK47型式期併行に比定できる。



33・SI1出土、50・51：SI2出土、110・112・113・116・120・122・124：SI4出土、136：SI6出土、
143：SK5出土、192：IIa層出土、248・249・252・253：IIb層出土、139・296：表土出土

※番号は、本報告書の遺物番号と対応する。
スケールは1/6

第154図 赤坂頭無し遺跡出土須恵器

②土師器(第155図)

碗A類：体部中位から口縁部にかけて内湾する丸底の碗で、a型式とb型式に分けられる。a型式は、やや深い丸底で、底部外面を静止ヘラケズリ調整する(74)。b型式は、a型式よりも浅く、平底気味になり、底部外面を静止ヘラケズリ調整する(28・84)。

B類：口縁部付近が外反する丸底の碗で、a型式とb型式に分けられ、いずれも外面を静止ヘラケズリ、内面をミガキ調整する。a型式は、体部中位から口縁部にかけて開きながら外反し(44)、b型式は、体部と口縁部の境を厚手につくり、そこから口縁部を外反させる(61・64)。

C類：底部が狭く平底気味で、口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。外面を回転ヘラケズリ、内面をヨコ方向にミガキ調整する(43)。

脚付碗A類：丸底の碗A類と同様な形態の坏部に、ハの字状に開くやや長い脚が付く(88)。

B類：丸底の碗A類と同様な形態の坏部に、ハの字状に開く、厚手で短い脚が付く(24)。

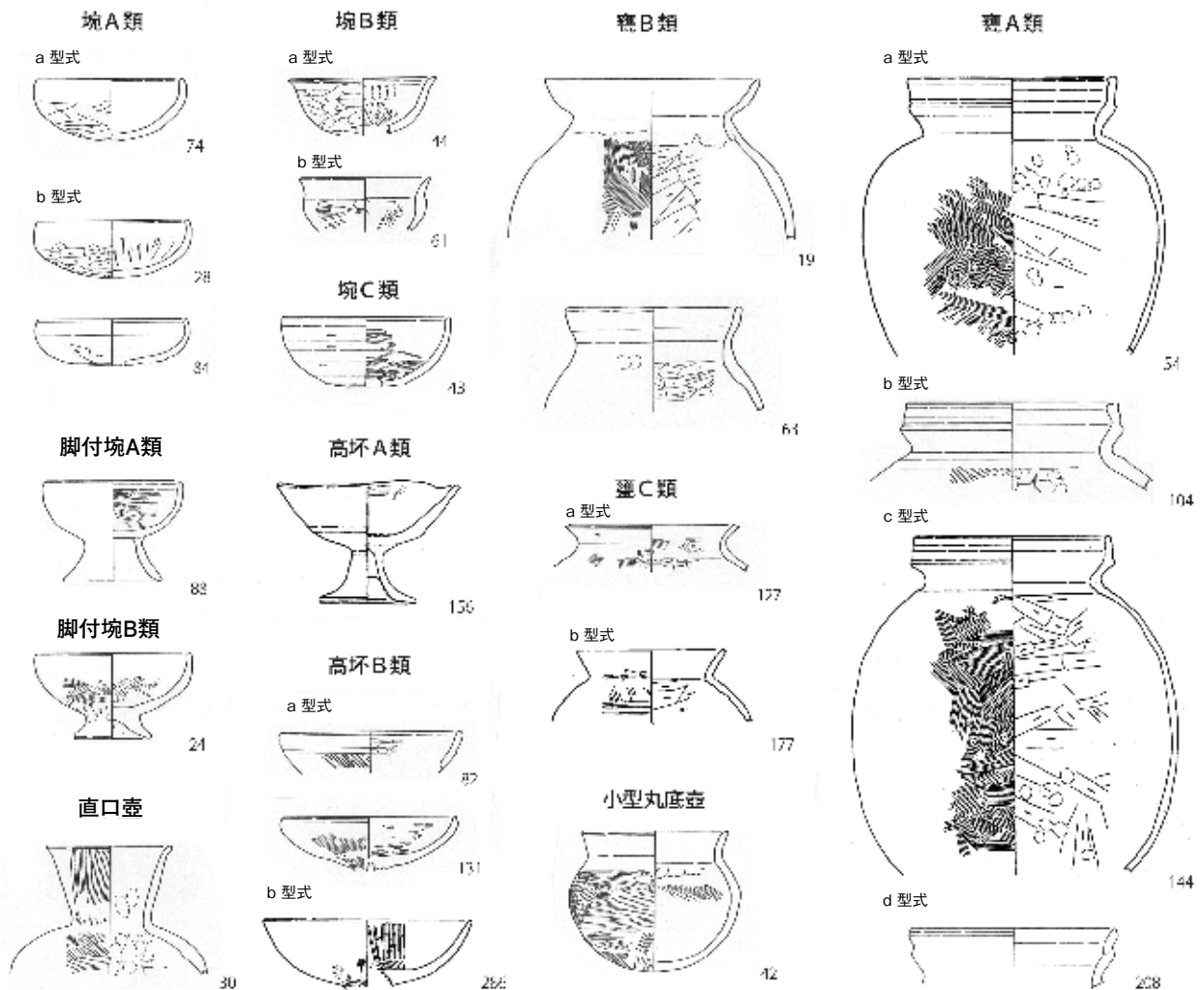
高坏A類：坏部は、底部と体部の境に段をもち、体部が外傾し、脚部下位が屈曲して開く(156)。

B類：坏部が丸底で、体部から口縁部にかけて緩やかに開くもので、a型式とb型式がある。a型式は、坏部の底が浅く、外面をハケメ、内面をヨコ方向にミガキ調整する(82・131)。b型式は、坏部の底が深く、外面をハケメ、内面をタテ方向にミガキ調整する(286)。

直口壺：頸部が長く、単純口縁の口縁部がやや開くもので、外面をハケメ調整するもの(30)。

小型丸底壺：胴部が球形を呈し、口縁部がやや外反するもので、胴部外面をハケメ調整するもの(42)。

甕A類：複合口縁をもつ長胴で丸底の甕で、外面の胴部上位を主に斜め方向のハケメ調整を施すもので、口縁部形態からa～d型式に分けられる。a型式は、複合口縁がほぼ直立し、口縁部下端の段が鋭い稜線で突出するもので、口縁端部を面取りする(54)。b型式は、口縁部下端の段が丸みをもつもので、口縁端部を面取



19・24・28・30：SI1出土、42・43・44：SI2出土、54・61・63・74：SI3出土、82・84・88・104：SI4出土、127・131：SI6、144：SK6出土、156：土器溜り、177：IIa層出土、208：IIb層出土、286：表土出土

※番号は、本報告書の遺物番号と対応する。
スケールは1/6

第155図 赤坂頭無し遺跡出土土師器

りする (104)。c 型式は、口縁部下端が下膨らみで丸みをもつもので、口縁端部を丸く仕上げる (144)。d 型式は、口縁部下端が丸みをもちながら屈曲し、口縁部がやや開くもので、口縁端部を細く仕上げる (208) B 類：単純口縁をもつ甕で、口頸部が内湾しながら開き、胴部外面をハケメ、内面をケズリ調整する (19・63)。C 類：単純口縁で、口頸部が外傾するもので、a 型式が口縁端部を面取りし (127)、b 型式が口縁部を丸く仕上げる (177)。

本遺跡出土土師器の形態的・技術的特徴をもとに、従来の土師器編年^(註2)と比較すると、壺A類a 型式・高坏A類・甕A類a～c 型式が天神川Ⅷ期併行、壺A類b 型式・甕A類d 型式が天神川Ⅸ期併行、脚付壺A類・直口壺が天神川Ⅷ～Ⅸ期併行に比定できる。

以上より、本遺跡出土の土師器は天神川Ⅷ～Ⅸ期併行に比定でき、須恵器との併行関係ではTK208～TK47型式期併行に相当することから、本遺跡の年代を5世紀中葉～末、すなわち古墳時代中期末～後期前葉に位置付ける。また、須恵器はTK23～TK47型式期併行を主体とすることから、天神川Ⅷ期併行は土師器主体で、天神川Ⅸ期併行に須恵器が出現すると考える。

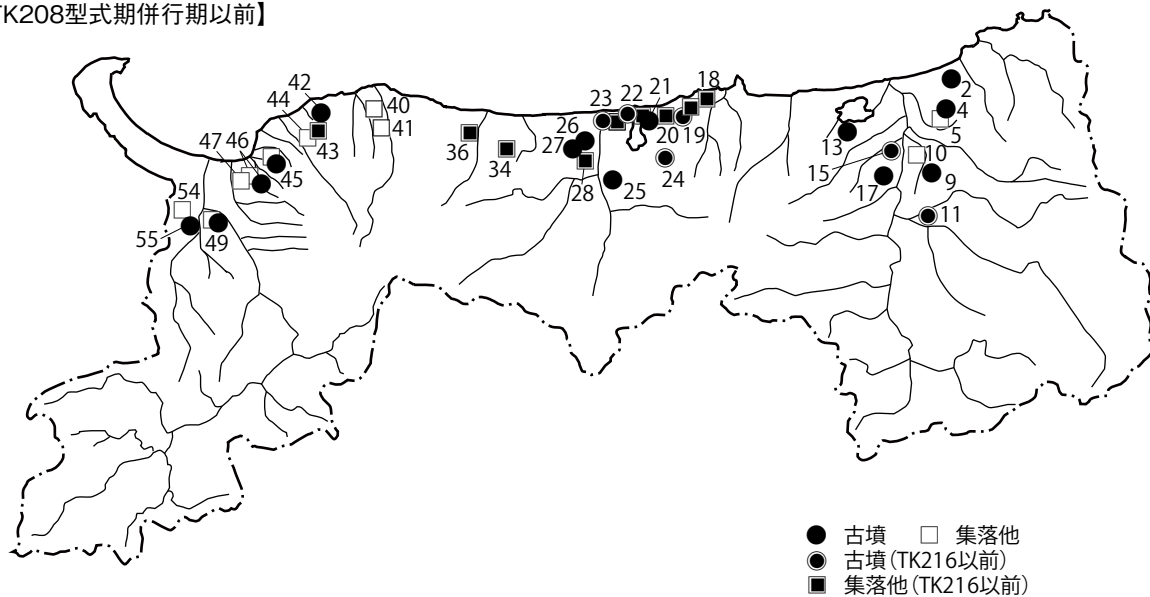
(2) 県内出土の出現期の須恵器について

ここでは、鳥取県内で出現期の須恵器を出土する遺跡の分布について時期ごとにみていく。その際、須恵器出土遺跡の性格や出土する須恵器の器種についても検討する。なお、ここでいう出現期とは陶邑編年のTK47型式期併行期以前を指し、概ね5世紀代に含まれるものとし、TK216型式期併行期以前、ON46～TK208型式期併行期、TK23～TK47型式期併行期の3時期に分けて検討する^(註3)。

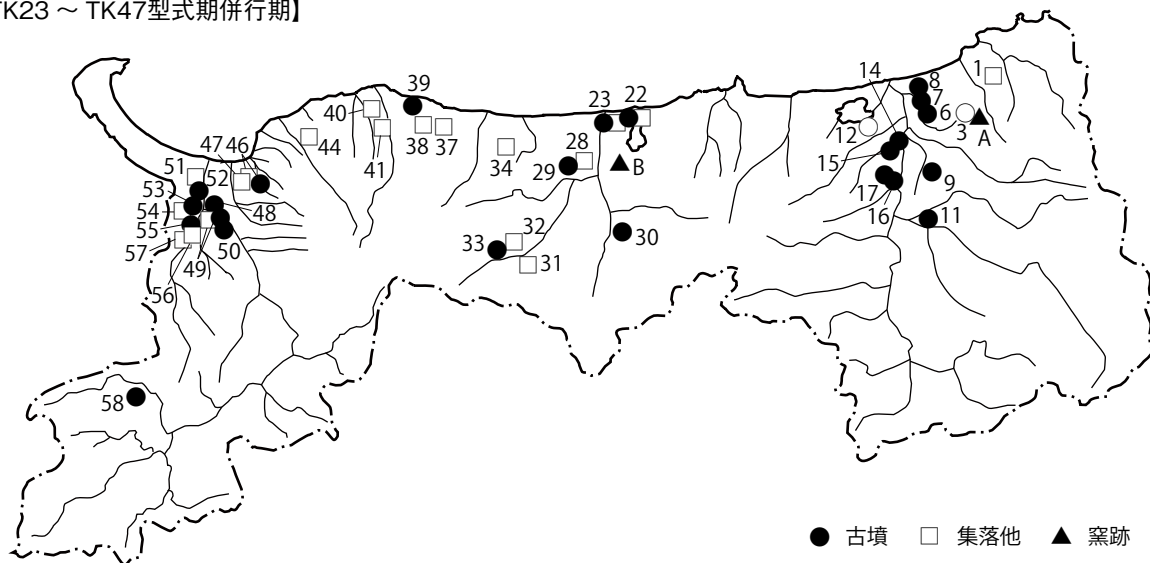
管見のかぎり、TK216型式期併行期以前の初期須恵器を出土する遺跡は12例と少なく、さらにTK73型式期併行期以前の例は、鳥取市下味野古墳群SX01出土有蓋高坏(15)、東伯郡湯梨浜町石脇第3遺跡森末地区SI02出土無蓋高坏(19)、同長瀬高浜遺跡f1地区出土大甕(23)などの数例にすぎない。

ON46～TK208型式期併行期になると、千代川流域、東郷湖北岸～海浜部、天神川流域、日野川流域など、県内の湖岸、海岸部や主要河川流域に多く分布するようになる。出土遺跡の性格は、東部地域では古墳が多いが、中西部地域では古墳と集落のいずれの遺跡でも多くみられる。その場合、東伯

【TK208型式期併行期以前】



【TK23～TK47型式期併行期】



第156図 県内の出現期における須恵器出土遺跡の分布

表33 県内における出現期須恵器の出土遺跡一覧(1)

No.	遺跡名	所在地	性格	遺構	器種	時期
1	上ミツエ遺跡	岩美郡岩美町	集落	SB02・04、SK04他	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・壺・甕	TK23～TK47
2	海士古墳群	鳥取市	古墳	23号墳	蓋坏・無蓋高坏・甕	ON46～TK208
3	鳥取市高岡出土	鳥取市	散布地		有蓋高坏	TK23
4	西浦山古墳	鳥取市	古墳		甕・甕	TK208
5	津ノ井蔵ノ谷遺跡	鳥取市	その他		蓋坏	TK208
6	津ノ井古墳群	鳥取市	古墳	39号墳	無蓋高坏・甕	TK47
7	杉崎古墳群	鳥取市	古墳	18号墳	蓋坏・有蓋高坏・甕・樽形甕・短頸壺	TK23
8	覚寺古墳群	鳥取市	古墳	8号墳	蓋坏・高坏	TK47
9	六部山古墳群	鳥取市	古墳	5・26・28・41・42号墳	蓋坏・高坏・甕・甕	ON46～TK208、TK47
10	西大路土居遺跡	鳥取市	集落		蓋坏・有蓋高杯	TK208
11	上野遺跡	八頭郡八頭町	古墳	6・12号墳	蓋坏・有蓋高坏・甕	TK216～ON46、TK23
12	鳥取市塞の谷出土	鳥取市	散布地		有蓋高坏・無蓋高坏	TK23～TK47
13	松原古墳群	鳥取市	古墳	22・30号墳	無蓋高杯・甕・器台・甕	ON46～TK208
14	服部墳墓群	鳥取市	古墳	34号墳	蓋坏・甕	TK47
15	下味野古墳群	鳥取市	古墳	SX01、44号墳	有蓋高坏・甕	TK73以前、TK23
16	倭文古墳群	鳥取市	古墳	6・7号墳	蓋坏・有蓋高坏・甕・甕	TK47
17	横枕古墳群	鳥取市	古墳	26・42・59・60・73号墳	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・壺・器台・甕	TK208～TK47
18	小浜ワラ畑遺跡	東伯郡湯梨浜町	集落	SI07・SI09	甕・甕	TK216
19	石脇第3遺跡	東伯郡湯梨浜町	古墳・集落	8号墳、森末地区SI02	無蓋高坏・樽形甕	TK73以前、TK208
20	石脇第1遺跡	東伯郡湯梨浜町	集落	SI01・05・07・13	蓋坏・無蓋高坏・甕	TK216～TK208
21	宇野古墳群	東伯郡湯梨浜町	古墳	4号墳	壺	ON46～TK208
22	南谷大山遺跡	東伯郡湯梨浜町	古墳・集落	SI09・10・13・28・30・38・4、SK19、SS01、19号墳	蓋坏・無蓋高坏・壺・甕	TK216～TK47
23	長瀬高浜遺跡	東伯郡湯梨浜町	古墳・集落他	1・24・67・86・88号墳、SX03・04・10・25・97・98、SI92・213	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・壺・横瓶・器台・甕	TK73以前、ON46～TK47
24	川上古墳群	東伯郡湯梨浜町	古墳		無蓋高坏・壺・横瓶	TK216
25	奥小山古墳群	倉吉市	古墳	8号墳	蓋坏・把手付埴	TK208
26	下張坪遺跡	倉吉市	古墳	30・32・35・64・66号墳	蓋坏・甕・壺・甕	ON46～TK208
27	大平ラ遺跡	倉吉市	古墳	1・2号墳	蓋坏・無蓋高坏・甕・樽形甕・甕	ON46～TK208
28	夏谷遺跡	倉吉市	集落	1号大壁住居状遺構、16・19・22・23・24・26・27・32・44号住居跡、6号段上遺構	蓋坏・無蓋高坏・甕・壺・把手付埴	TK216～TK47
29	沢べり遺跡	倉吉市	古墳	1・5号墳	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・脚付甕	TK47
30	丸山遺跡	東伯郡三朝町	古墳	4号墳、SX-06	蓋坏・有蓋高坏	TK47
31	横峯遺跡	東伯郡三朝町	集落	A地区第8堅穴住居跡	蓋坏・無蓋高坏・甕	TK47
32	下山平古墳群	倉吉市	古墳	1号墳	蓋坏・有蓋高坏・甕	TK47
33	下野辺遺跡	倉吉市	集落	SI06	蓋坏・有蓋高坏・甕	TK47
34	上種第5遺跡	東伯郡北栄町	集落	堅穴住居跡13・14・16・17・31号	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・甕	TK216、TK23

表34 県内における出現期須恵器の出土遺跡一覧(2)

No.	遺跡名	所在地	性格	遺構	器種	時期
35	上種第6遺跡	東伯郡北栄町	集落	竪穴住居跡3・6・7号	蓋坏・有蓋高坏	TK23
36	三保第1遺跡	東伯郡琴浦町	集落	2区溝3	蓋坏・甕	TK216～ON46
37	笠見第3遺跡	東伯郡琴浦町	集落	SI26・28・33・56、SS1	蓋坏・甕	TK23～TK47
38	八橋第8・9遺跡	東伯郡琴浦町	集落	SI9、南谷部第Ⅱ層・第Ⅲ層	蓋坏・高坏	TK23～TK47
39	別所古墳群	東伯郡琴浦町	古墳	5号墳	無蓋高坏	TK47
40	住吉第2遺跡	西伯郡大山町	集落	SI01・03・05・06・08	蓋坏・有蓋高坏・壺・甕	ON46～TK23
41	赤坂頭無し遺跡	西伯郡大山町	集落	SI1～4・6、SK5他	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・脚付埴	TK208～TK47
42	ハンボ塚	西伯郡大山町	古墳		無蓋高坏・壺・樽形甕	TK208
43	門前第2遺跡	西伯郡大山町	集落	竪穴住居9	甕	TK216
44	古御堂笹尾山遺跡	西伯郡大山町	集落	竪穴住居21・22・24、竪穴8	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・樽形甕	ON46～TK23
45	富岡播磨洞遺跡	西伯郡大山町	集落・古墳	SK14、SD7、2号墳	蓋坏・有蓋高坏・甕	TK23
46	百塚遺跡群	米子市	集落・古墳	14・22・24・26・32・35・37・47・51・105・111～113・117・118号墳、115号竪穴住居、SI04・11・21、SB03	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕・壺・脚付埴・把手付埴	TK208～TK47
47	大下畑遺跡	米子市	集落	SI07・10	蓋坏・有蓋高坏・甕	TK208～TK47
48	青木遺跡	米子市	集落・古墳	CS105・10・11、FS122、JSI01、BSX02・03・07・13	蓋坏・有蓋高坏・甕・甕	TK208～TK47
49	諏訪西山ノ後遺跡	米子市	古墳	古墳1、土塚墓1	蓋坏・無蓋高坏・甕	TK23～TK47
50	坂長下門前遺跡	米子市	集落	35号墳	甕	TK47
51	長砂第3・第4遺跡	米子市	集落	SI02・04・SI10・12・17	蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・甕	TK23～TK47
52	東宗像遺跡	米子市	古墳	5・6・7号墳	蓋坏・有蓋高坏・甕	TK47
53	新山山田遺跡	米子市	集落・古墳	土器溜り、2号墳周溝	蓋坏・有蓋高坏・甕・甕	TK23～TK47
54	研石山遺跡	米子市	集落		蓋坏・無蓋高坏	TK208
55・56	古市遺跡群・カハラケ田遺跡	米子市	集落・古墳	SI08・09、SD40	蓋坏・有蓋高坏・甕	TK23～TK47
57	清水谷遺跡	米子市	集落・古墳	SI12・13、SX30	蓋坏・無蓋高坏	TK23～TK47
57	印賀古墳群	米子市	集落		蓋坏・甕・甕	TK23～TK47
A	埴見・中の谷窯跡	東伯郡湯梨浜町	窯跡		蓋坏・無蓋高坏・甕	TK47
B	七谷窯跡	鳥取市	窯跡		高坏	TK47

※No.は、分布図の番号と対応する。
報告書・出典は割愛した。

郡湯梨浜町石脇第1・第3遺跡(19・20)、同長瀬高浜遺跡(23)、米子市百塚遺跡群(46)、同青木遺跡(48)のように、須恵器を出土する古墳と集落とが近接して立地する傾向がある。

TK23～TK47型式期併行期には、前段階での傾向が継続するのに加えて、倉吉市横峯遺跡(31)、同下野辺遺跡(33)、東伯郡三朝町丸山遺跡(30)、日南町印賀古墳群(58)など山間部地域の遺跡にも分布するようになる。一方で、前段階までの遺跡でみられなくものもある。また、現在の東伯郡北栄町・琴浦町から西伯郡大山町にかけては、集落における須恵器の出土が顕著にみられる。これは当該期の調査遺跡が集落到偏る傾向があることにもよるだろうが、古墳から離れて立地する集落にも須恵器が普及したことを示すといえよう。さらに、この段階には、鳥取市七谷池窯跡(A)や東伯郡湯梨浜町埴見・中の谷窯跡(B)など、須恵器生産地が確認されている。

また、須恵器の器種構成をみると、蓋坏・高坏(有蓋・無蓋)・甕が基本的であり、それに加えて壺・甕などがみられる。この基本的な器種構成は、必ずしもどの遺跡でも揃うというわけではなく、たとえば蓋坏または高坏主体であるとか、TK208型式期併行期以前には、そもそも須恵器の出土数自体が少ない場合もある。これは、須恵器が稀少品であり、土師器が一般的であったためであろう。また、これらの器種構成は、ほぼ土師器にみる供膳具・貯蔵具の構成と同様であるが、土師器甕のような煮沸具としては使用されていない。

以上のように、県内では、TK216型式期併行期以前の出土例が少なく、限定的な分布を示しており、古墳か、古墳とごく近接する集落からのみ出土することから、遺跡を営む有力者層が、陶邑窯などから稀少品として入手し、古墳で使用した製品の一部を集落に持ち込んだ可能性が高い。しかし、長瀬高浜遺跡では、陶邑窯の製品とは異なる特徴をもつ須恵器や、加耶産の陶質土器など半島系の土器が出土することから、渡来系の製品が直接的に持ち込まれたか、渡来系の技術による未知の窯跡が近くに存在した可能性がある。

次のON46～TK208型式期併行期には、須恵器出土遺跡が増加する傾向がある。この段階にも、古墳を中心に須恵器が出土することから、古墳祭祀や葬送儀礼での使用が普及し、一部が集落での日常品として使用されたと考える。この段階の須恵器窯は確認されていないが、遺跡単位では出土する須恵器が少数であることから、陶邑窯の製品を入手した可能性が高いといえよう。一方で、この段階は植野浩三氏の指摘する「地方窯の第1の拡散」^(註4)に相当することから、次の段階まで継続的に須恵器が出土する遺跡などでは、近くに未知の須恵器窯が存在した可能性がある。

TK23～TK47型式期併行期には、「地方窯の第2の拡散」期といわれるとおり、県内でも確実に窯跡がみられるようになる。そして、須恵器出土遺跡の分布範囲が広がるほか、遺跡ごとの出土数が増加するとともに、集落での出土が増加する傾向にあるから、陶邑窯の製品が流通したのではなく、在地の窯で生産された可能性が高い。そして、かなりの量が日常品としても使用されるようになったと考える。また、現在のところ、当該期の窯跡が多く確認されているわけではないが、分布の集中地域の周辺で未知の窯跡が存在する可能性もあろう。

赤坂頭無し遺跡から出土した須恵器は、県内におけるTK23～TK47型式期併行期の傾向を反映しており、集落遺跡での須恵器の使用が普及しはじめた段階の良好な事例といえよう。しかし、土師器の方がより多く使用される傾向からみて、須恵器は未だ稀少品であったといえよう。また、この遺跡で使用された須恵器は、陶邑窯から入手されたというよりは、在地における未知の窯において生産された可能性が高いが、その問題は今後の調査・研究に委ねたい。

【註】

(1) 平安学園クラブ1966『陶邑古窯址群Ⅰ』。田辺昭三1980『須恵器大成』角川書店

(2) 牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書

(3) 鳥取県内の出現期須恵器については、2012年3月16日開催の平成23年度埋蔵文化財専門職員研修「遺物調査検討課程」において、実物をみながら検討した。その際、ご講演いただいた奈良大学の植野浩三先生より、多くのご教示をいただいた。なお、本報告の内容は、下記の当日の資料にもとづいている。

岡田裕之2012「山陰における須恵器の出現について」・「資料・山陰における出現期の須恵器」『古墳時代須恵器の導入と展開』鳥取県埋蔵文化財センター

(4) 植野浩三1998「須恵器生産の展開」『中期古墳の展開と変革－5世紀における政治的・社会的変化の具体相(1)－』第44回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

5 赤坂頭無し遺跡の古墳時代集落について(第157図)

赤坂頭無し遺跡では、当時における集落全体の一部が確認できたのみであるが、ここでは現状でわかる範囲で集落構成について考えたい。

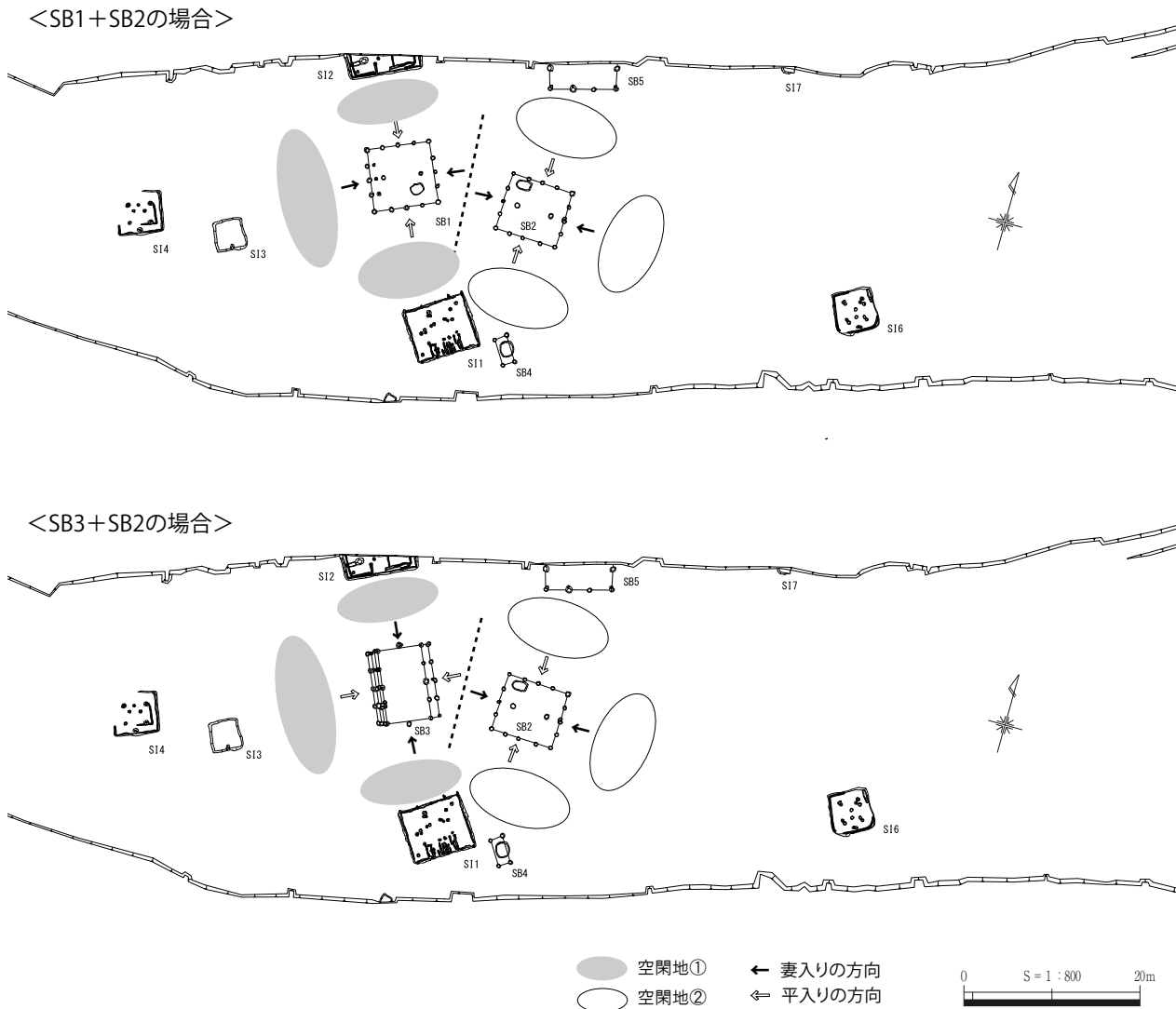
本遺跡では、丘陵上に古墳時代の竪穴住居跡6棟(SI1～4・6・7)、掘立柱建物跡5棟(SB1～5)を確認した。そのうち、丘陵の最も高い位置を占有するのが、竪穴住居跡SI1・2と、掘立柱建物跡SB1～5であり、竪穴住居跡SI3・4・6・7は尾根よりやや低位の丘陵斜面上に位置していた。このうち、SB3がやや時期的に下るが、SB1と主軸方向が同じか、またはほぼ90°に振れることから、SB1を意識してSB3が築かれたと推定される。すなわち、それほど両者の時期差はなく、両建物が建て替えを経ながら他の建物群と共存した可能性がある。このことから、竪穴住居跡SI1・2と、掘立柱建物跡SB1またはSB3、SB2・4・5からなる空間を中心域、その周囲に竪穴住居跡SI3・4・6・7が配置される空間構成であったと考える。

これらの建物群の性格であるが、竪穴住居跡SI1・2・4・6は、柱穴や壁溝、間仕切り溝、特殊ピット等を備えた構造からみて、他遺跡の事例と相違なく、住居と考える。SI3は住居としては非常に小規模で、柱穴や壁溝等も確認できないが、特殊ピットを備え、貼床をもつことから住居と同等の機能をもつと推定する。SI7は一部が確認されたのみであるが、遺構の隅の部分から想定する形態や床面までの深さからみて、住居であろう。なお、竪穴住居跡SI1～4・6は、主軸方向がほぼ南北(または東西)で一定するほか、SI1を除く4基は特殊ピットを南壁側に配し、SI1も南壁側に複数の間仕切り溝があることから、いずれも一定方向を意識して築かれたことがわかる。そして、SI1は壁立建物と考えられるほか、SI1・2は規模の面からみても突出することから、SI1・2が主に、SI3・4・6が従の立場に位置付けられる。

また、掘立柱建物跡SB1～5のうち、SB1・2は平屋建物であり、SB3は二面庇付の掘立柱建物と考えた。SB5は一部しかわからないが、南側で残存する柱穴列の数や間隔、柱穴の規模等からみて、SB1・2と同様な構造をとる可能性がある。SB4は、小規模の掘立柱建物である。これらのうち、SB1・2とSB3の性格であるが、SB1・2が倉庫または集会施設、SB3が高床倉庫または祭殿と想定した。ただし、SB1・2が屋内棟持柱の建物であることから、両建物の東西両面が妻側となり、SB3は南北両面が妻側となる。妻入りか平入りかを決定するのはむずかしいが、SB1とSB2が共存する段階と、SB3とSB2が共存すると仮定する段階とでは、両建物の機能分担のみならず、中心域の建物群とその空閑地からなる空間配置に対する意識が異なる可能性がある。

以上のように、赤坂頭無し集落では、大型の住居と、それに付随する大型倉庫または集会施設からなる空間が集落の中心を占め、それを取り巻く形で小規模の住居群が存在した状況であったと推定する。そして、中心域に居住するのが、集落を構成する家族集団を統べる家長層の家族であり、周辺域に居住するのが一般構成員となる家族であったとすれば、家長層の家族を中心に、中心域の掘立柱建物群を集落構成員である家族集団が共同で管理したと想定できる。

次に、周辺遺跡との関係を見ると、赤坂頭無し遺跡の東側には、古墳時代前期の四隅突出型を含む墳墓4基からなる石井垣上河原遺跡が位置しており、周辺にこの時期の集落が存在する可能性が高い。また、本遺跡の西側には赤坂小丸山遺跡が位置し、弥生時代後期の竪穴住居跡2棟と、古墳時代中期の竪穴住居跡4棟を含む集落域の一部を確認している。さらに、本遺跡でも弥生時代後期前葉の竪穴住居跡1棟のほか、包含層中から同時期の弥生土器片が多く出土している。このことから、赤坂



第157図 赤坂頭無し集落の空間配置

から石井垣にかけての一带では、少なくとも弥生時代後期から古墳時代後期前葉にかけて、集落域が形成されていたと考える。

このように、赤坂頭無し遺跡とその周辺では、長期間にわたる居住域が同一尾根上に密集して築かれるのではなく、時期ごとに複数の丘陵や台地上を点々と移動しながら、居住域が形成されてきたと考える。これは、西伯郡大山町茶畑遺跡群のように、弥生時代中期中葉から古墳時代後期にかけて、複数の丘陵上を移動しながら断続的に集落が営まれる様相^(註1)とも類似しているだろう。これに対して、東伯郡琴浦町笠見第3遺跡のように、弥生時代中期後葉から古墳時代後期中葉にかけての建物群が、一つの丘陵上に長期間にわたって継続的に営まれる様相^(註2)とは異なるといえる。このような、集落変遷の様相の差が何に起因するのかについては今後の課題であり、当遺跡の所在する地域では、赤坂小丸山遺跡の調査成果も踏まえながら検討する必要があるだろう。

【註】

- (1)財団法人鳥取県教育文化財団2004『茶畑遺跡群』鳥取県教育文化財団調査報告書93
岡野雅則2010「茶畑第1遺跡」『出雲大社の建築考古学』同成社
- (2)財団法人鳥取県教育文化財団2004『笠見第3遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書86
鳥取県埋蔵文化財センター 2007『笠見第3遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書14

6 まとめ

赤坂頭無し遺跡では、縄文時代、弥生時代後期前葉、古墳時代後期前葉、古代以降を中心とする遺構群や遺物を確認した。

縄文時代の遺構としては、早期前半と後期前葉頃の落とし穴を検出したほか、包含層中から少量の石鏃も出土したことから、縄文時代には、本遺跡の立地する丘陵が良好な狩猟の場として利用されていたと考える。

弥生時代の遺構としては、後期前葉の円形竪穴住居跡1棟を確認したのみだが、住居内や包含層中などから中期後葉～後期の弥生土器が多く出土しており、本遺跡および調査区外の同一丘陵上に、弥生時代の集落が形成されていたと推定する。

古墳時代には、後期前葉の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を中心とする集落が形成されていたことを確認した。なかでも、竪穴住居跡SI1や、掘立柱建物跡SB1・SB2・SB3は、類例の少ない特殊な構造であった。すなわち、竪穴住居跡SI1は壁立建物の可能性があり、掘立柱建物跡SB1・SB2は方形の屋内棟持柱付きの平屋建物であり、SB3は両面庇付きの建物であると考えた。また、古墳時代の遺構内や包含層中からは、出現期の須恵器や土師器が多く出土しており、須恵器が集落に普及し始める時期の良好な事例といえる。

以上のように、赤坂頭無し遺跡では、縄文時代から古墳時代後期前葉にかけて、そして古代以降において、断続的ながら、当該地域の人々が生活した痕跡を確認できた。今後は、石井垣上河原遺跡や赤坂小丸山遺跡などの周辺遺跡との関係を探ることで、当該地域における生活環境とその変遷を理解することが期待されよう。